

## 運動有能感の視点からみた 各運動領域への得意感と体育授業経験の関係の検討

### A Study of the Relationship between Feeling of Being Good in Movement Fields and Physical Education Classes from a viewpoint of Sport Competence

岡澤 哲子\*

Tetsuko Okazawa

The purpose of this study was to clarify the relationship between feeling of being good in some movement fields and physical education classes from a viewpoint of Sport Competence. One hundred one students (27males, 74females) were asked to answer Sport Competence scale (Okazawa et al., 1996), Scheme scale in Physical Education Classes (Oyama, 2009) and Feeling of being good in some movement fields.

As a result, it has become clear high Sport Competence begets a feeling of being more good in some movement fields and the much experience frequency of ingenuity of physical education. However, the relationship between feeling of being good in some movement fields and experience frequency of the ingenuity of physical education has become clear that it depends on the characteristics of the movement field.

#### はじめに

大学における小学校教諭免許状の教科に関わる体育の授業で、小学校の体育科の各領域の内容を指導する際に、学生の不得意な運動領域が偏っているため、指導上の工夫に困難を感じることもある。個人の記録やパフォーマンスが明確に見えやすい器械運動系や陸上運動系は不得意であるという学生が多い。ボール運動系ではゴール型などの型により得意感が異なる。また、器械運動や陸上運動系が不得意な学生は体育や運動そのものへの愛好度が低いように感じられる。

これらの得意感の偏りの原因が、ガラヒュー (1999) の「運動発達の段階とステージ」における初期の段階での、基礎づくりや専門性の経験の欠如や偏りであったとしたら、体育の目標である「生涯にわたる豊かなスポーツライフ」をめざすための選択肢を少なくしているのではないかと危惧する。体育科における教師の役割はこの選択肢をできるだけ多いままで子どもたちの前に広げていくことであると考える。

子どもたちがいつまでも運動好きで運動が得意であるためには、体育授業は内発的な動機づけによる主体的な取り組みであることが望ましい。岡沢ら (1996) は、内発的な動機づけを高めるためには、内的な自己認知としての運動有能感を高めることが効果的であり、運動有能感は3つの因子「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」で構成されていると述べている。その運動有能感を高める小学校の授業実践は、陸上系の種目の実践 (陳ら、2014；上江洲ら、2011)、器械運

---

\* こども学科 教授

動系種目の実践（北村ら、2014；小畑ら、2013；小畑ら、2011；小畑ら、2009；）、ボール運動系種目の実践（井上ら、2013；池田ら、2012；仲井ら、2011；小畑ら、2010；小畑ら、2007；鎌田ら、2005；）、水泳系種目も実践（金沢ら、2014；青井ら、2013）のように、運動領域別の報告がある。これら領域別の報告から、運動有能感を高めるためには、体育授業の経験の量的な違いよりは、体育授業の内容やねらいという質的な経験の違いの方がより影響が大きいことが明らかである。また、体育授業でどのような経験をしたかが運動やスポーツの継続に影響を及ぼす（杉原編著、2011）。そのため、体育授業の経験が運動領域の得意感とどのような関係にあるかを、内発的動機づけを生じさせる運動有能感の視点から検討することで、得意感の偏りが軽減され、子どもたちの豊かなスポーツライフをねらいとした指導上の示唆が得られるのではないかと考えた。

そこで本研究では、運動有能感の視点から、体育授業経験の違いにより小学校の各運動領域に対する得意感が異なっていることを検証し、有能感を高める体育授業実践研究の今後の展開に対する示唆を得ることを目的とした。

## 方 法

1. 対象：T大学1年生101名（男子27名、女子74名）を対象に質問紙調査を行った。

### 2. 調査の手続き

1) 調査時期：2013年10月～11月

#### 2) 運動有能感テスト

岡沢ら（1996）が作成した「運動有能感測定尺度」を用いた。第1因子は「身体的有能さの認知」、第2因子は「統制感」、第3因子は「受容感」である。加えて性別および体育授業が好きかどうかの回答を3段階で求めた。

#### 3) 体育授業の経験調査

大山（2009）が作成した「運動有能感を高める体育授業の工夫」の測定尺度を用いた。第1因子（下位尺度10項目）は「技能向上の工夫」、第2因子（下位尺度8項目）は「仲間関係の工夫」である。

#### 4) スポーツに対する得意感の調査

高校までに展開されるスポーツの中から、小学校教育要領の体育科で定められた領域に当てはまる16のスポーツ（1. 短距離走、2. 長距離走、3. 走り幅跳び、4. 走り高跳び、5. マット運動、6. 跳び箱運動、7. 鉄棒、8. バスケットボール、9. サッカー、10. ハンドボール、11. バレーボール、12. テニス、13. 野球、14. ソフトボール、15. 水泳、16. ダンス）を選択し、それらのスポーツが得意かどうかの回答を5段階で求めた。加えて、幼児期と児童期それぞれの時期に、運動が好きであったかどうかの回答を5段階で求めた。

## 3. 結果の処理

調査によって得られたデータの処理は、SPSS statistics 22統計パッケージを用いて行った。

## 結果と考察

### 1. 運動領域別得意感

「スポーツに対する得意感の調査」の16のスポーツを、次の7つの運動領域に分けた。

1. 短距離走、2. 長距離走、3. 走り幅跳び、4. 走り高跳びの4つを「陸上運動系」に、5. マット運動、6. 跳び箱運動、7. 鉄棒の3つを「器械運動系」に、8. バスケットボール、9. サッカー、

10. ハンドボールの3つを「ボール運動系ゴール型」に、11. バレーボール、12. テニスを「ボール運動系ネット型」に、13. 野球、14. ソフトボールを「ボール運動系ベースボール型」に、15. 水泳を「水泳系」に、16. ダンスを「表現運動系」として得意感の平均を算出した。

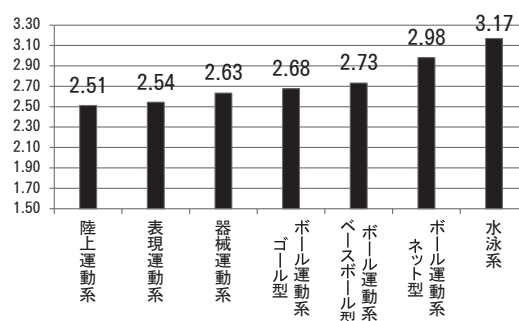


図1 運動領域別得意感の平均

7つの運動領域の得意感の平均を求めた。図1は、平均得点順に比較したものである。7つの運動領域を水準とした一要因分散分析の結果、有意差があった ( $F(6)=6.67, p<.000$ )。多重比較の結果、「水泳系」「ボール運動系ネット型」は、他の5領域すべてに比べてより高い得点を示した。他の5領域は相互に有意差がなかった。

「ボール運動系ネット型」の特性は、対戦する相手とネットを挟んで攻撃と守備をしながらボールを操作するため、相手との直接の接触はないが、どのような守備や攻撃で相手のミスを誘えるのかを駆け引きするところに面白さがある。しかし実際の現場では、技能レベルが低い場合は相手に返すことだけで達成感を感じている場面が多いのではないだろうか。すなわち、「ボール運動系ネット型」本来の楽しさを知ったうえで得意感が高いのかどうかは明確でない。

「水泳系」では、浮く・進む・呼吸するという3つの要素の獲得のためには、初心者特有の意識とのギャップがあり、獲得には時間がかかる。そのため十分にそのギャップを埋める指導をされなかったら得意感は低いはずである。水泳の単元は6月から8月の短期間、合同クラスで指導者も限られる中で行われることが多い。また、梅雨時には授業ができない日もある。そのような現状にもかかわらず、得意感が高いのは、幼児期や児童期における民間のスイミングスクールでの経験が影響しているのではないかと考える。

「水泳系」では、浮く・進む・呼吸するという3つの要素の獲得のためには、初心者特有の意識とのギャップがあり、獲得には時間がかかる。そのため十分にそのギャップを埋める指導をされなかったら得意感は低いはずである。水泳の単元は6月から8月の短期間、合同クラスで指導者も限られる中で行われることが多い。また、梅雨時には授業ができない日もある。そのような現状にもかかわらず、得意感が高いのは、幼児期や児童期における民間のスイミングスクールでの経験が影響しているのではないかと考える。

## 2. 運動有能感と各運動領域への得意感の関係

運動有能感の各因子得点および総得点を上位群・中位群・下位群に分け、その群を要因とした各運動領域への得意感の平均得点の一要因分散分析を行った。結果を表1～4に示した。

表1の通り、「身体的有能さの認知」では、表現運動系のみ群間に有意差がなかった。他の運動領域では、群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が中位群、下位群よりも、中位群

表1 身体的有能さの認知と各運動領域の得意感

運動領域	身体的有能さの認知群別	n	平均	SD	df	F
陸上運動系	上位群	27	3.20	0.57	2	22.29***
	中位群	39	2.53	0.80		
	下位群	35	1.96	0.74		
器械運動系	上位群	27	3.41	0.94	2	19.99***
	中位群	39	2.67	0.95		
	下位群	35	2.00	0.70		
ボール運動系ゴール型	上位群	27	3.42	0.79	2	22.70***
	中位群	39	2.69	0.77		
	下位群	35	2.09	0.77		
ボール運動系ネット型	上位群	27	3.70	0.85	2	17.40***
	中位群	39	3.00	0.79		
	下位群	35	2.40	0.95		
ボール運動系ベースボール型	上位群	27	3.48	1.09	2	15.71***
	中位群	39	2.81	1.05		
	下位群	35	2.07	0.82		
水泳系	上位群	27	3.78	1.34	2	4.60*
	中位群	39	3.21	1.44		
	下位群	35	2.66	1.53		
表現運動系	上位群	27	2.70	1.07	2	2.88 ns
	中位群	39	2.74	1.09		
	下位群	35	2.20	0.99		

表2 統制感と各運動領域の得意感

運動領域	統制感群別	n	平均	SD	df	F
陸上運動系	上位群	22	2.98	0.85	2	14.18***
	中位群	41	2.74	0.67		
	下位群	38	2.00	0.82		
器械運動系	上位群	22	3.12	0.95	2	8.05**
	中位群	41	2.81	1.05		
	下位群	38	2.17	0.84		
ボール運動系ゴール型	上位群	22	3.20	1.04	2	8.17**
	中位群	41	2.76	0.85		
	下位群	38	2.28	0.76		
ボール運動系ネット型	上位群	22	3.36	0.92	2	7.38**
	中位群	41	3.20	0.95		
	下位群	38	2.53	0.93		
ボール運動系ベースボール型	上位群	22	3.02	1.28	2	2.56 ns
	中位群	41	2.87	0.95		
	下位群	38	2.42	1.16		
水泳系	上位群	22	3.95	1.25	2	6.45**
	中位群	41	3.27	1.47		
	下位群	38	2.61	1.46		
表現運動系	上位群	22	2.64	1.18	2	1.43 ns
	中位群	41	2.71	1.05		
	下位群	38	2.32	1.02		

が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

表2の通り、「統制感」では、ボール運動系ネット型と表現運動系のみ群間に有意差がなかった。他の運動領域では、群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

表3 受容感と各運動領域の得意感

運動領域	受容感群別	n	平均	SD	df	F
陸上運動系	上位群	34	2.88	0.90	2	5.10**
	中位群	29	2.35	0.72		
	下位群	38	2.30	0.85		
器械運動系	上位群	34	2.81	1.23	2	0.83 ns
	中位群	29	2.50	0.86		
	下位群	38	2.57	0.94		
ボール運動系 ゴール型	上位群	34	3.08	1.02	2	6.04**
	中位群	29	2.62	0.78		
	下位群	38	2.36	0.82		
ボール運動系 ネット型	上位群	34	3.21	1.01	2	2.46 ns
	中位群	29	3.07	0.87		
	下位群	38	2.71	1.03		
ボール運動系 ベースボール型	上位群	34	3.22	1.21	2	6.28**
	中位群	29	2.69	1.06		
	下位群	38	2.33	0.93		
水泳系	上位群	34	3.59	1.56	2	2.84 ns
	中位群	29	3.21	1.42		
	下位群	38	2.76	1.42		
表現運動系	上位群	34	2.62	1.16	2	0.25 ns
	中位群	29	2.59	1.12		
	下位群	38	2.45	0.98		

表4 運動有能感と各運動領域の得意感

運動領域	運動有能感別	n	平均	SD	df	F
陸上運動系	上位群	31	3.13	0.69	2	22.34***
	中位群	35	2.54	0.71		
	下位群	35	1.94	0.77		
器械運動系	上位群	31	3.27	1.01	2	12.04***
	中位群	35	2.54	0.92		
	下位群	35	2.16	0.85		
ボール運動系 ゴール型	上位群	31	3.43	0.77	2	23.73***
	中位群	35	2.53	0.78		
	下位群	35	2.15	0.75		
ボール運動系 ネット型	上位群	31	3.63	0.78	2	14.22***
	中位群	35	2.91	0.92		
	下位群	35	2.47	0.93		
ボール運動系 ベースボール型	上位群	31	3.29	1.05	2	10.04***
	中位群	35	2.81	1.18		
	下位群	35	2.16	0.84		
水泳系	上位群	31	3.68	1.38	2	3.82*
	中位群	35	3.20	1.43		
	下位群	35	2.69	1.55		
表現運動系	上位群	31	2.77	1.06	2	1.54 ns
	中位群	35	2.57	1.12		
	下位群	35	2.31	1.02		

表3の通り、「受容感」では、器械運動系、ボール運動系ネット型、水泳系、表現運動系において群間に有意差がなかった。他の運動領域では、群間に有意差があった。多重比較の結果、陸上運動、ボール運動系ゴール型、ボール運動系ベースボール型では上位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

表4の通り、「運動有能感（合計得点）」では、表現運動系のみ群間に有意差がなかった。他の運動領域では、群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

運動有能感と各運動領域への得意感の関係では、特に「表現運動系」の得意感が、運動有能感すべての因子の群間に有意差がないことが顕著な特徴である。表現運動の学習は、表したいイメージも動きも多様で、個の違いがあることを前提としている。したがって、どのように学ばせるかよりも、何を教えるのか、どんな力を育てるのが問われている。茅野ら（2013）の小学校の表現運動での体育授業研究実践事例では、表現運動・ダンスを好きにさせておくことがまず第一であるという結論にとどまっておらず、さらに教育プログラムの開発の必要性を今後の課題としている。「受容感」の因子得点の群間で、「器械運動系」「ボール運動系ネット型」「水泳系」「表現運動系」の得意感の有意差がなかったことは、受容感を高めることと関連していなかったことになる。それらの領域が技能面で難しいものであるだけに、受容感の側面からも運動有能感を高めることが得意感も高めることに寄与するのではないかと考える。

### 3. 体育授業と各運動領域の得意感の関係

運動有能感を高める体育授業の経験頻度の各因子得点を上位群・中位群・下位群に分け、その群を要因とした各運動領域への得意感の平均得点の一要因分散分析を行った。結果を表5、表6に示した。

表5の通り、「技能向上の工夫」では、水泳系のみ群間に有意差があった。他の運動領域では、群間に有意差がなかった。多重比較の結果、水泳系では、上位群が中位群、下位群よりも有

意に高い得意感の得点を示した。「水泳系」の得意感が高い者は、技能向上の工夫をする授業をより多く経験していると理解できる。「水泳系」の学習は、表6にみられるように、「仲間関係の工夫」の群間で有意差がなかった。すなわち、水泳系の得意感や運動有能感是个々の技能に帰するという現状であると考えられる。

表6の通り、「仲間関係の工夫」では、「ボール運動系ゴール型」と「ボール運動系ベースボール型」のみ群間に有意差があった。他の運動領域では、群間に有意差がなかった。多重比較の結果、ボール運動系ゴール型では、上位群が中位群、下位群より高い得意感の得点を示した。また、ボール運動系ベースボール型では、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。「ボール運動系ゴール型」と「ボール運動系ベースボール型」は集団スポーツであることから、仲間づくりの工夫をしやすいという面がある。他の領域は、個人のパフォーマンスが明確に評価されやすい場面が多いため、仲間関係の工夫をしにくいと考えられる。

#### 4. 運動有能感と体育授業の関係

運動有能感の各因子得点および総得点を上位群・中位群・下位群に分け、その群を要因とした体育授業の経験頻度の平均得点の一要因分散分析を行った。結果を表7～10に示した。

表7の通り、「身体的有能さの認知」では、「技能向上の工夫」で群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が中位群、下位群よりも有意に高い経験頻度の得点を示した。

表8の通り、「統制感」では、「技能向上の工夫」「仲間関係の工夫」のどちらにも群間に有意差がなかった。

表9の通り、「統制感」では、「技能向上の工夫」「仲間関係の工夫」のどちらにも群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い経験頻度の得点を示した。

表10の通り、「運動有能感（合計得点）」では、「技能向上の工夫」「仲間関係の工夫」のどちらにも群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い経験頻度の得点を示した。

表5 各運動領域への得意感と体育授業（技能向上の工夫）

運動領域	「技能向上の工夫」の体育授業経験頻度群別	n	平均	SD	df	F
陸上運動系	上位群	42	2.64	0.81	2	0.84 ns
	中位群	28	2.45	0.85		
	下位群	31	2.40	0.95		
器械運動系	上位群	42	2.72	1.15	2	0.71 ns
	中位群	28	2.70	0.88		
	下位群	31	2.45	0.97		
ボール運動系 ゴール型	上位群	42	2.87	0.95	2	1.67 ns
	中位群	28	2.56	0.88		
	下位群	31	2.52	0.91		
ボール運動系 ネット型	上位群	42	3.23	0.97	2	2.25 ns
	中位群	28	2.80	0.92		
	下位群	31	2.81	1.05		
ボール運動系 ベースボール型	上位群	42	3.02	1.23	2	2.80 ns
	中位群	28	2.64	1.03		
	下位群	31	2.42	0.98		
水泳系	上位群	42	3.74	1.38	2	5.70 **
	中位群	28	2.75	1.60		
	下位群	31	2.77	1.33		
表現運動系	上位群	42	2.57	1.11	2	0.42 ns
	中位群	28	2.39	1.03		
	下位群	31	2.65	1.08		

表6 各運動領域への得意感と体育授業（仲間関係の工夫）

運動領域	「仲間関係の工夫」の体育授業経験頻度群別	n	平均	SD	df	F
陸上運動系	上位群	35	2.66	0.87	2	2.170 ns
	中位群	28	2.23	0.88		
	下位群	38	2.58	0.82		
器械運動系	上位群	35	2.96	1.15	2	2.900 ns
	中位群	28	2.43	0.81		
	下位群	38	2.48	0.99		
ボール運動系 ゴール型	上位群	35	3.01	0.99	2	3.660 *
	中位群	28	2.48	0.77		
	下位群	38	2.52	0.91		
ボール運動系 ネット型	上位群	35	3.21	0.86	2	1.710 ns
	中位群	28	2.95	1.15		
	下位群	38	2.79	0.97		
ボール運動系 ベースボール型	上位群	35	3.23	1.27	2	5.810 **
	中位群	28	2.54	0.99		
	下位群	38	2.42	0.93		
水泳系	上位群	35	3.63	1.54	2	2.740 ns
	中位群	28	2.82	1.49		
	下位群	38	3.00	1.39		
表現運動系	上位群	35	2.66	1.03	2	0.36 ns
	中位群	28	2.43	1.14		
	下位群	38	2.53	1.08		

表7 体育授業の工夫と身体的有能さの認知

体育授業の工夫	身体的有能さの認知群別	n	平均	SD	df	F
「技能向上の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	27	32.30	3.02	2	4.23 *
	中位群	39	30.36	4.18		
	下位群	35	29.63	3.46		
「仲間関係の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	27	24.30	3.69	2	2.53 ns
	中位群	39	23.21	3.56		
	下位群	35	22.31	3.09		

これらの結果は、体育授業の工夫の尺度化を報告した大山（2009）の結果とほぼ同じであることが確認できた。

しかし、統制感との関係で、大山（2009）の結果と若干異なり、統制感を高めるための授業の工夫に関しては、まだ課題があることを示している。

表 8 体育授業の工夫と統制感

体育授業の工夫	統制感群別	n	平均	SD	df	F
「技能向上の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	22	30.95	5.89	2	0.46 ns
	中位群	41	30.88	3.41		
	下位群	38	30.16	2.39		
「仲間関係の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	22	23.09	5.06	2	0.27 ns
	中位群	41	23.49	2.90		
	下位群	38	22.92	3.03		

表 9 体育授業の工夫と受容感

体育授業の工夫	受容感群別	n	平均	SD	df	F
「技能向上の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	34	32.82	3.13	2	15.83 ***
	中位群	29	30.90	2.41		
	下位群	38	28.45	3.98		
「仲間関係の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	34	25.06	2.98	2	11.66 ***
	中位群	29	23.28	2.63		
	下位群	38	21.45	3.67		

表 10 体育授業の工夫と運動有能感

体育授業の工夫	運動有能感群別	n	平均	SD	df	F
「技能向上の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	31	31.94	3.87	2	6.30 **
	中位群	35	31.14	3.91		
	下位群	35	28.94	2.91		
「仲間関係の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	31	24.23	4.03	2	3.43 *
	中位群	35	23.40	3.37		
	下位群	35	22.06	2.80		

## 5. 幼児期・児童期の運動得意感と運動有能感の関係

運動有能感の各因子得点および総得点を上位群・中位群・下位群に分け、その群を要因とした幼児期および児童期の運動得意感の平均得点の一要因分散分析を行った。結果を表11～14に示した。

表11の通り、「身体的有能さの認知」では、「幼児期の運動得意感」「児童期の運動得意感」のどちらにも群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

表12の通り、「統制感」では、「幼児期の運動得意感」「児童期の運動得意感」のどちらにも群間に有意差があった。多重比較の結果、「幼児期の運動得意感」では上位群が下位群よりも、「児童期の運動得意感」では、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

表13の通り、「受容感」では、「幼児期の運動得意感」「児童期の運動得意感」のどちらにも群間に有意差があった。「幼児期の運動得意感」「児童期の運動得意感」ともに、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

表14の通り、「運動有能感（合計得点）」では、「幼児期の運動得意感」「児童期の運動得意感」のどちらにも群間に有意差があった。

表 11 幼児期・児童期の運動得意感と身体的有能さの認知

時 期	身体的有能さの認知群別	n	平均	SD	df	F
幼児期の運動得意感	上位群	27	4.52	0.80	2	17.78 *
	中位群	39	3.67	1.26		
	下位群	35	2.71	1.34		
児童期の運動得意感	上位群	27	4.81	0.48	2	56.85 ns
	中位群	39	3.87	1.10		
	下位群	35	2.20	1.13		

表 12 幼児期・児童期の運動得意感と統制感

時 期	統制感群別	n	平均	SD	df	F
幼児期の運動得意感	上位群	22	4.14	1.46	2	6.74 **
	中位群	41	3.80	1.19		
	下位群	38	2.97	1.33		
児童期の運動得意感	上位群	22	4.50	1.22	2	10.47 ***
	中位群	41	3.63	1.37		
	下位群	38	2.89	1.31		

表 13 幼児期・児童期の運動得意感と受容感

時 期	受容感群別	n	平均	SD	df	F
幼 児 期 の 運 動 得 意 感	上位群	34	4.21	1.30	2	6.68 **
	中位群	29	3.41	1.30		
	下位群	38	3.11	1.31		
児 童 期 の 運 動 得 意 感	上位群	34	4.35	1.18	2	10.83 ***
	中位群	29	3.41	1.38		
	下位群	38	2.92	1.38		

表 14 幼児期・児童期の運動得意感と運動有能感

時 期	運動有能感群別	n	平均	SD	df	F
幼 児 期 の 運 動 得 意 感	上位群	31	4.42	1.09	2	18.75 ***
	中位群	35	3.71	1.25		
	下位群	35	2.66	1.19		
児 童 期 の 運 動 得 意 感	上位群	31	4.68	0.87	2	36.91 ***
	中位群	35	3.71	1.30		
	下位群	35	2.37	1.06		

意感」のどちらにも群間に有意差があった。多重比較の結果、上位群が中位群、下位群よりも、中位群が下位群よりも有意に高い得意感の得点を示した。

以上の結果から、幼児期・児童期に運動が得意であったことが、その時期の運動有能感を形成し、それが土台になって様々な運動やスポーツをする体育授業における子どもたちの意欲につながっていくことが明確になった。

## 6. 運動得意感の性差

幼児期および児童期における運動得意感の得点の男女間の t 検定を行った。その結果を図 2 に示した。

幼児期では男女に有意差がなかった ( $t(99)=1.61, p=.111$ )。児童期では男女に有意差があり ( $t(99)=3.33, p<.01$ )、男子の得意感得点が女子よりも有意に高かった。運動の得意感が男子よりも低いことが、女子を運動に向かわせない理由であるのならば、児童期にも男女差なく運動への得意感が高まるような手立てを考える必要がある。

図 1 運動領域別得意感の平均を、性別に分けて表示したものが図 3 である。

各運動領域の運動得意感の得点の男女間の t 検定を行った。

その結果、「表現運動系」「器械運動系」「水泳系」には有意差がなかった。

「陸上運動系 ( $t(99) = 3.01, p<.01$ )」「ボール運動系ゴール型 ( $t(99) = 2.24, p<.05$ )」「ボール運動系ネット型 ( $t(99) = 2.32, p<.05$ )」「ボール運動系ベースボール型 ( $t(99) = 3.07, p<.01$ )」には有意差があった。これら 4 領域はどちらも男子が女子よりも有意に高い得点を示した。

t 検定で有意差はなかったが、女子の方が得意感が高かった「表現運動系」の性差は、「ダンス」自体がもっているジェンダーに起因していると考えられる(岡澤、2008)。「水泳系」に性差がないことは喜ばしいことである。他の運動領域においても、性別に関係なく実施できる場所や施設が学校以外にあるのにもかかわらず、水泳系だけ性差がない理由は、「水泳」自体が「ジェンダー」に左右されない領域として認知されているからではないかと考える。

## 7. 体育愛好度と体育授業の関係

体育愛好度の得点を上位群・中位群・下位群に分け、その群を要因とした体育授業の経験頻度の平均得点の一要因分散分析を行った。結果を表 15 に示した。

表 15 の通り、「技能向上の工夫」「仲間関係の工夫」のどちらにも群間に有意差があった。多重

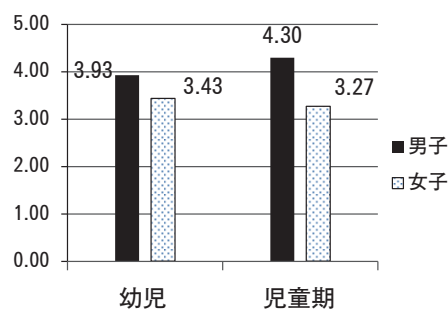


図2 幼児期・児童期の運動得意感

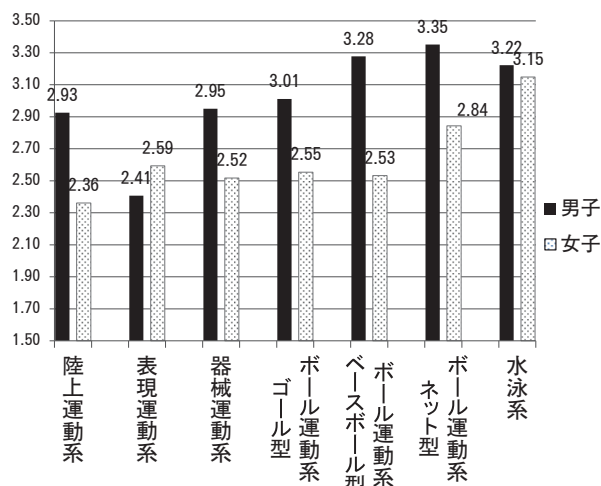


図3 運動得意感の性差

比較の結果、上位群が下位群よりも有意に高い体育授業経験頻度得点を示した。

体育の授業への愛好度が高いほど、工夫のある授業を経験している頻度が高い。体育の授業を工夫することによって体育好きの子どもを育てるために、今後一層、授業の工夫に関する実践的な研究が必要である。

表 15 体育愛好度と体育授業

授業の工夫	体育愛好度群別	n	平均	SD	df	F
「技能向上の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	54	31.52	3.30	2	4.45*
	中位群	40	29.53	4.03		
	下位群	5	28.40	3.05		
「仲間関係の工夫」の体育授業経験頻度	上位群	54	24.13	3.21	2	5.48**
	中位群	40	22.05	3.40		
	下位群	5	21.00	4.53		

## まとめ

本研究では、運動有能感の視点から、体育授業経験の違いにより小学校の各運動領域に対する得意感が異なっていることを検証し、有能感を高める体育授業実践研究の今後の発展に示唆を得ることを目的とした。101名の大学生（男子27名、女子74名）に運動有能感テスト、体育授業の工夫尺度に回答を求め、さらにスポーツへの得意感を質問紙法で質問した。その結果、運動有能感が高いことは、運動領域への得意感および工夫された体育授業の経験頻度も高いことが明らかとなった。しかし、工夫された体育授業の経験頻度と運動領域への得意感の関係は、運動領域の特性により異なることが明確となり、以下の知見を得た。

### 1. 技術の困難度が高い運動領域について

技能の困難度から技能習得に必要なとされる時間がかかるため、運動に内在する価値をとらえきれない段階で見せかけの得意感を感じていることが考えられる。例えば、得意感が高い「ボール運動系ネット型」では、本来の楽しさを知ったうえで得意感が高いのかどうかは明確でない。ボール運動系ネット型では、対戦する相手とネットを挟んで攻撃と守備をしながらボールを操作する面白さがある。実際の現場では、相手に返せたことのみで達成感を感じている場面が多いのではないだろうか。

「水泳系」では、浮く・進む・呼吸するという3つの要素の獲得のためには、初心者特有の意識とのギャップを克服する必要がある、獲得には時間がかかる。そのため十分にそのギャップを克服する指導をされなければ得意感は低いはずである。しかしながら本研究で得意感が最も高い結果となったのは、体育授業における短期的な指導の効果ではなく、幼児期や児童期のスイミングスクールでの長期間にわたる経験の影響が大きいのではないかと考えられる。学校体育で本来得べき水泳への得意感や運動有能感を、学校以外の場で得ている。

### 2. 学習のねらいが不明確な運動領域について

運動有能感と各運動領域への得意感の関係では、特に「表現運動系」の得意感が、運動有能感すべての因子の群間に有意差がないことが顕著な特徴である。表現運動の学習は、表したいイメージも動きも多様で、個の違いがあることを前提としている。したがって、どのように学ばせるかということよりも、何を教えるのか、どんな力を育てるのかという学習のねらいの根本的なことが問われている。運動領域の中で唯一「競争」のない表現運動系では、さらなる教育プログラムの開発の必要性が今後の課題であろう。

### 3. 運動有能感を高める工夫に困難性がある運動領域について

「受容感」の因子得点の群間で、「器械運動系」「ボール運動系ネット型」「水泳系」「表現運動系」の得意感の有意差がなかったことは、これらの領域の得意感の取得には受容感が関連しなかったと解釈される。これらの領域は技能面の指導が難しい運動領域でもあるのでその指導法の開発も必要である。しかし、技能指導面だけでなく受容感面で運動有能感を高める工夫をするこ



とが得意感を高めることに寄与するのではないかと考える。また、運動有能感と体育授業の工夫との間に、「統制感」で有意差がみられなかったことから、運動有能感を高めるためには、すべての運動領域で統制感を高める体育授業の工夫が必要である。すなわちどのような情報が子どもたちの頑張る気持ちを高めるのかをさらに検討していくべきである。

#### 4. 運動領域の特性が指導に活かしやすい運動領域について

集団運動・スポーツ、例えば「ボール運動系ゴール型」「ボール運動系ベースボール型」は、仲間づくりの工夫をしやすいという面がある。他の領域は、個人のパフォーマンスが明確に評価されやすい場面が多いため、仲間関係の工夫をしにくいと考えられる。そのため、教師が仲間関係を活かしやすい領域の指導に流れ、仲間関係の工夫をしにくい領域での工夫を怠りやすい。したがって仲間関係の工夫をしにくい領域での実践研究を発展させるべきである。

#### 5. ジェンダーが認知されている運動領域について

幼児期・児童期に運動が得意であったことが基礎になり、様々な運動やスポーツをする体育授業によって、子どもたちの運動有能感が形成され、意欲がつながっていくことが明確になった。しかし、女子の児童期の運動の得意感が男子よりも低いことが、女子がしだいに運動に向かわない状況を示しているのならば、幼児期にも児童期にも男女差なく運動への得意感が高まるような手立てを引き続き考える必要がある。その際、運動の選択は、岡澤（2008）の報告にあるような運動領域自体がもっているジェンダー（例えば表現運動は女の子に似合うなど）にも起因していることは否めないため、留意する必要がある。

以上5点の知見は、体育授業の指導現場でも経験上意識化されている課題を含んでいると思われる。しかし、本研究が小学校体育科の各運動領域に対する得意感に体育授業経験の違いが及ぼす影響を運動有能感の視点から検証したことでより明確となった。

今後、さらに子どもたちの運動有能感を高めるための体育授業の実践研究を積み重ねることで、子どもたちが様々な運動領域で得意感を偏りなく得るための指導法が明確となり、子どもたちが運動好きになり、豊かなスポーツライフへの選択肢を多く持つことができると考える。

## 文 献

- 青井唯（2013）小学校水泳授業の現状と児童の学習意欲に関する検討．愛知教育大学保健体育講座研究紀要 38:75-77.
- ガラヒュー，D. L.（杉原隆監訳）（1999）幼少年期の体育．大修館書店 .68-73.
- 池田勉・石川英志（2012）小学校体育科における系統性を考慮した技能習得とコミュニケーション能力の育成：ボール運動（ネット型）における実践を通して．岐阜大学教育学部研究報告．教育実践研究 14(2):119-134.
- 井上寛崇・岡澤祥訓・小畑治・石川元美（2013）運動有能感を高めるベースボール型ゲームの授業づくりーティーボールの実践をもとに．奈良教育大学教育実践開発研究センター紀要 22 :149-156.
- 鎌田望・斉藤和久・岩田靖・北村久美（2005）小学校体育におけるネット型ゲームの教材づくりに関する検討ー「連携プレイ」の実現可能性からみたアタック・プレルボールの分析ー．信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究 6: 111-120.
- 金沢 翔一・吉永武史（2014）小学校中学年における面かぶりクロール習得のための学習指導に関する研究．体育科教育学研究 30（1）:33-46.
- 北村政弘・岡出美則・近藤智靖・内田 雄三（2014）小学校中・高学年におけるネット型ゲームのゲームパフォーマンスに関する達成基準の事例的検討．体育科教育学研究 30(1):1-16.
- 仲井順・平野智之（2011）運動有能感と戦術学習に着目したゴール型ゲーム授業の実践研究．宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 34:215-222.
- 小畑治・岡澤祥訓・石川元美（2007）運動有能感を高める体育授業に関する研究ーフラッグフットボール

- の授業実践から－. 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 16:123-130.
- 小畑治・岡澤祥訓・井上寛崇・石川元美 (2009) 運動有能感を高める鉄棒運動の授業づくり－小学校高学年の実践から－. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 18:91-99.
- 小畑治・岡澤祥訓・石川元美・森本寿子 (2010) 体育授業における「かべバスバスケットボール」の有効性の検討－ゲームパフォーマンス及び運動有能感の視点から－. 奈良教育大学教育実践総合センター紀要 19:119-127.
- 小畑治・岡澤祥訓・石川元美・森本寿子 (2011) 運動有能感を高めるマット運動の授業づくり－技能獲得に必要な技術認識を高める工夫を中核に－. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 20:137-144.
- 小畑治・岡澤祥訓・井上寛崇・石川元美 (2013) 運動有能感を高める跳び箱運動の授業づくり－子ども  
の主体的な学びの追求をもとに－. 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要 22:315-320.
- 岡澤哲子 (2008) 幼児の運動有能感に及ぼすジェンダーの影響. スポーツとジェンダー研究 6:42-52.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達および性差に関する研究. スポーツ  
教育学研究 16 (2) :145-155.
- 大山貴史 (2009) 体育授業の経験が運動湯脳幹井及ぼす影響～運動有能感を高める体育授業の視点から～.  
2009年度奈良教育大学卒業論文集 :58-65.
- 杉原隆編著 (2011) 生涯スポーツの心理学. 福村出版 :123-125.
- 陳洋明・池田延行 (2014) 小学校中学年における幅跳びの学習指導に関する一考察—3年生と4年生の授業  
成果の比較を通して—. 体育科教育学研究 30:17-32.
- 茅野理子 (2013) 栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について－ダンス必修化に関するア  
ンケート調査から－. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 36:25-32.
- 上江洲隆裕・岡澤祥訓・木谷博記 (2011) 教師の言語活動による「継続的フィードバック」が技能成果、  
運動有能感に及ぼす影響に関する研究－走り幅跳びの授業実践を通して－. 奈良教育大学教育実践総  
合センター研究紀要 20:159-166.